3 損益計算書を見直そう

●経営分析の手順

CASE～考えてみよう！

G社は、総資本対経常利益率が業界の標準よりも低い会社です。その原因を調べてみると、売上高に対する経常利益の割合が、標準値に比べて低いことがわかりました。会社の経営分析をするうえで、次には、どんな比率を調べたらよいでしょうか？　以下の比率のうち、とくに調べる必要があると思われるものを3つあげてください。

①売上高総利益率　②売上高対人件費比率
③売上高対広告費比率　④売上高対通信費比率
⑤売上高対支払利息比率　⑥売上高対営業利益率

経営分析の手順

第1節で、収益性の良否をどうやって調べるかを説明しました。いろいろな比率を用いて、会社の経営状態が良好であるかどうかを観察・評価することを「**経営分析**」といいます。

経営分析のなかで大切な比率が、「**総資本対経常利益率**」です。もし、この比率が悪かったら、次は何を見るべきなのでしょう。

すでに学んだように、**資本利益率＝売上高利益率×資本回転率**の関係ですから、総資本対経常利益率は、次のように分解することができます。

総資本対経常利益率＝売上高対経常利益率×総資本回転率

$$\frac{\text{経常利益}}{\text{総資本}} = \frac{\text{経常利益}}{\text{売上高}} \times \frac{\text{売上高}}{\text{総資本}}$$

もし、総資本対経常利益率が悪いとすれば、売上高対経常利益率か、**総資本回転率**のどちらか（あるいは両方）が悪いことになります。〔CASE〕の会社では、売上高に対する経常利益の割合（売上高対経常利益率）が低いことがわかったわけです。

このように、会社の経営分析を行う場合、まず大きな比率をつかみ、次に、それに関連する比率のよしあしを見ていきます。

重要な売上高総利益率

〔CASE〕において調べる必要があるものとして、まず、1番目に取り上げたいのが、⑥の売上高対営業利益率です。もしも、この比率が標準値よりも高ければ、それでいて売上高経常利益率が悪いのですから、原因は営業外の損益にあることになります。

ポイント
経営の改善をめぐるテーマのなかでは、売上高総利益率をどう向上させるかが主要な課題になることが多い。売上高総利益率は、一定の売上高に対して売上総利益がどのくらい上がっているか、つまり、どのくらい効率よく利益が上げられるかを示している比率だからである。

逆に、この比率も低いのであれば、さらに他の比率を調べることになります。その際に、①の売上高総利益率は、見落とせません。これが2番目です。売上高総利益率の高低は、収益性に非常に大きな影響を与えています。

これで2つ、候補があがりましたので、あと1つです。残りの②～⑤は、売上高に対する経費の割合を示しています。人件費、広告費、通信費、支払利息のうち、どの比率が重要なのでしょうか。

この4つの経費の科目のうち、通信費以外は、経営分析で必ず着目する項目です。ですから、通信費以外のどれを選んでも的はずれではありません。とはいっても、金額が一番大きいのは人件費ですから、3番目の比率としては、②の売上高対人件費比率をあげるべきでしょう。

学習ポイント
損益計算書を用いた経営分析では、売上高のなかで、経常利益、営業利益、売上総利益、人件費がどのくらいの割合を占めるかを見るのが最大のポイント。